

寺田寅彦

春
寒



春

寒

スカンジナビアの遠い昔の物語が、アイスランド人の口碑に残って伝えられたのを、十二世紀の終わりにスノルレ・スツール・ラソンという人が書きつづった記録が *Heimskringla* という書物になって現代に伝えられている。その一部が英訳されているのをおもしろそうだと思っ買って来たまま、しばらく手を触れないで打っちやっておいた。

ことしの春のまだ寒いころであった。毎日床の中に寝たきりで、同じような単調な日を繰り返しているうちに、

ふと思い出してこの本を読んでみた。初めの半分はオラフ・トリリーグヴェスソンというノルウェーの王様の一代記で、後半はやはり同じ国の王であったが、後にセント・オラフと呼ばれた英雄の物語である。

大概は勇ましくまた殺伐な戦闘や篡奪さんだつの顛末てんまつであるが、それがただの歴史とはちがって、中にいろいろな対話が簡潔な含蓄のある筆で写されていたり、繊細な心理が素朴そぼくな態度でうがたれていたりするのをおもしろいと思った。それから一つの特徴としては、王の軍中に随行して、時々いくさの戦いくさの模様や王の事蹟じせきを即興的に歌った詩

人 (Scalds) の歌がところどころにはさまれている事である。それがために物語はいつそう古雅な詩的な興趣を帯びている。

日本に武士道があるように、北欧の乱世にはやはりそれなりの武士道があった。名誉や信仰の前に生命を塵埃じんあいのように軽んじたのはどこでも同じであったと見える。女にも烈婦があった。そしてどこことなくイブセンの描いたのに似たような強い女も出て来た。さすがにワルキリの国だと思われたりした。

オラーフ・トリীগヴェスソンが武運つたなく最後を

遂げる船戦ふないくさの条は、なんとなく屋島やしまや壇だんの浦うらの戦いくさに似
 通っていた。王の御座船「長蛇ちようだ」のまわりには敵の小船
 が蝗いなごのごとく群がって、投げ槍やりや矢が飛びちがい、青
 い刃がひらめいた。盾たてに鳴る鋼はがねの音は叫喊きようかんの声に和し
 て、傷ついた人は底知れぬ海に落ちて行った。……王の
 射手エーナル・タンバルスケルヴェはエリツク伯をね
 らって矢を送ると、伯の頭上をかすめて舵柄だへいにぐざと立
 つ。伯はかたわらのフィンを呼んで「あの帆柱のそばの
 背の高いやつを射よ」と命ずる。フィンの射た矢は、ま
 さに放たんとするエーナルの弓のただ中であたって弓

は両断する。オラーフが「すさまじい音をして折れ落ちたのは何か」と聞くと、エーナールが「王様、あなたの手からノルウエーが」と答えた。王が代わりに自分の弓を与えたのを引き絞ってみて「弱い弱い、大王の弓にはあまり弱い」と言つて弓を投げ捨て、剣と盾たてを取つて勇ましく戦つた。——私は那須なすの与一よいちや義経よしつねの弓の話をお出ししたりした。

私がこの物語を読んでいた時に、離れた座敷で長女がピアノの練習をやっているのが聞こえていた。そのころ習い始めたメンデルスゾーンの「春の歌」の、左手でひ

く低音のほうを繰り返し繰り返し繰り返していった。八分の一の低音の次に八分の一の休止があつてその次に急速に駆け上がる飾音のついた八分の一が来る。そこでペダルが終わつて八分の一の休止のあとにまた同じような律動が繰り返される。

この美しい音楽の波は、私が読んでいる千年前の船戦ふないくさの幻像の背景のようになって絶え間なくつづいて行つた。音が上がって行く時に私の感情は緊張して戦の波も高まって行つた。音楽の波が下がって行く時に戦もゆるむように思われた。投げな槍やりや斧おのをふるう勇士が、皆音楽

に拍子を合わせているように思われた。そして勇ましいこの戦いくさの幻は一種の名状し難い、はかない、うら悲しい心持ちのかすみの奥に動いているのであった。

今はこれまでというので、王と將軍のコールビオルンはふなばた舷から海におどり入る。エリツクの兵は急いで捕えようとしたが、王は用心深く盾たてを頭にかざして落ち入ったので捕える事ができなかつた。盾たてを背にしていた將軍は盾の上に落ちかかり、沈む事ができなかつたために虜とりことなつた。

王はこの場で死んだと思われた。しかし泳ぎの達人で

あつた王は、盾の下で鎖帷子くさりかたびらを脱ぎ捨てここを逃げのびてヴェンドランドの小船に助けられたといううわさも伝えられた。ともかくも王の姿が再びノルウエーに現われなかつたのは事実である。

すぐれた英雄の戦没した後、こういううわさの生まれたのはいつの世でも同じだと思われる。この戦いくさを歌つた当時の詩人の歌の最後の句にも「人はその願う事をやがて信ずる」と言っている。

ピアノの音はこの物語の終わりまでつづいて行つた。読み終わった本を枕まくらもとへ置いて、蒲団ふとんをかぶつて聞

いていると、音楽の波に誘われて物語の幻は幾度となく繰り返し繰り返し現われた。そしてこの王の運命の末路のはかなさがなとなしに身にしみるようであった。

その後にもまたつづけて書物の後半になっているセント・オラーフの一代記を読んだ。

向こうところに敵なくして剣の力で信仰と権勢を植え付けて行った半生の歴史はそれほど私の頭に今残っていないが、全盛の頂上から一時に墜落してロシアに逃げ延び、再びわずかな烏合うごうの衆を引き連れてノルウェーへ攻め込むあたりからがなとなしく心にしみている。そのこ

ろから王の周囲には一種の神秘的な影がつきまどっていて不思議な幻を見たり、さまざまな奇蹟きせきを現わしている。

スチクレスタードの野の戦いくさの始まる前に、王は部下の将卒の団欒だんらんの中で、フィン・アルネソンのひざを枕まくらにしてうたた寝をする。敵車が近寄るのでフィンが呼びさますと、「もう少し夢のつづきを見せてくれればよかったのに」と言っつてその夢の話をして聞かせる。高い高い梯子はしごが立ってその上に天の戸が開けていた、王がそれを登りつめて最後の段に達した時に起こされたのだと言う。フィンは、その夢が王の思うほどよい夢ではない、

眠りの不足のせいでなければそれは王の身の上にかかる事だと言った。

王は黄金を飾った兜かぶとをきて、白地に金の十字をあらわした盾たてと投げ槍なやりとを持ち、腰にはネーテと名づける剣を帯び、身には堅固な鎖帷子くさりかたびらを着けていた。

美しい天気であったのが、戦いくさが始まると空と太陽が赤くなつて、戦の終わるころには夜のように暗くなつたと伝えられている。天文学者の計算によるとその日に日食はなかったはずだという事である。

戦いは王に不利であった。……王はトーレ・フンドに

切りつけたが、魔法の上着は切れなかった。そしてトールの着たとなかいの皮からはっと塵ちりが飛び散った。王は將軍のビオルン(熊^{くま})に「鋼鉄のかみつけないこの犬(フンド)はお前が仕止めてくれ」と言った。ビオルンは斧おのをふるってその背を鎚つちにして敵の肩を打つとフンドはよろめいて倒れんとした。トールスタイン・クナーレスメドは斧で王を撃って左のひざの上を切り込んだ。……王がよろめき倒れてかたわらの石によりかかり、神の助けを祈っているとところへ敵將が来て首と腹を傷つけた。

戦いが終わってトール・フンドは王の死骸しがいを地上に延

ばして上着を掛けた。そして顔の血潮をぬぐって見ると
頬ほおは紅を帯びて世にも美しい顔ばせに見えた。王の血が
フンドの指の間を伝い上って彼の傷へ届いたと思うと、
傷は見るまに癒合ゆごうして包帯しなくてもよいくらいになっ
た。……王の遺骸はそれから後もさまざまの奇蹟きせきを現わ
すのであった。

私がこのセント・オラーフの最期の顛末てんまつを読んだ日
に、偶然にも長女が前日と同じ曲の練習をしていた。そ
して同じ低音部だけを繰り返し繰り返しさらっていた。
その音楽の布しいて行く地盤の上に、遠い昔の北国の曠ひろい

野の戦いが進行して行つた。同じようにはかないうら悲しい心持ちに、今度は何かしら神秘的な気分が加わっているのであつた。

忠義なハルメソンとその子が王のひつぎ柩を船底に隠し、石ころをつめたにせの柩を上に飾つて、フィヨルドの波をこぎ下る光景がありあり目に浮かんだ、そうしてこの音楽の律動がかい櫂の拍子を取つて行くように思われた。

その後にも長女は時々同じ曲の練習をしていた。右手のほうでひいているメロディだけを聞くとそれは前から耳慣れた「春の歌」であるが、どうかして左手ばかりの

練習をしているのを幾間いくまか隔とこてた床とこの中で聞いていると、不思議に前の書中の幻影が頭の中によみがえって来て船戦ふないくさの光景や、セント・オラーフの奇蹟きせきが幾度となく現あわれては消え、消えては現あわれた。そして音の高低しちようや弛張しちようにつれて私の情緒も波のように動いて行つた。異国の遠い昔に対するあくがれの心持ちや、英雄の運命の末をはかなむような心持ちや、そう言つたようなものが、なんとなく春の怨うらみを訴えるような「無語歌」と一つにとけ合つて流れ漂つて行くのであつた。

そして今でもこの曲を聞くと、蒲団ふとんの外に出して書物

をささえた私の指先に、しみじみしみ込むようであった
春寒をも思い出すのである。

（大正十年一月、渋柿）

日本文学電子図書館

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

昭和45年8月20日 第38刷発行



日本文学電子図書館